

乳児期の母子関係

—影響する因子とあるべき姿—

高木俊一郎



児童発達講座 ⑧

態になり、六年で殆んど成人と区別できないほどにめざましい発達をとげることを教えてくれました。最近の精神医学は、また乳児期の人間関係が、将来における人間関係の基本的な態度を決定するとさえいつています。そうであれば、私たちは、乳児に対する態度について、慎重に考えなおしてみる必要があるのではないでしょうか。

このテーマが選ばれた理由はそこにあり、また乳児に直接的に最も大きな影響を与えるのは母親であることを皆様に訴えたいためであると想像されます。

遺伝学的には、父親も母親も等分に因子を伝えているはずですが、胎児の育つ環境は母体であることには気付いていながら、母親のからだそのものが、胎児の育つ環境であることを余り重要視しなかったようです。

生まれたばかりの赤ん坊の脳は、白紙のようなもので、毎日接する母親の与える印象がそれに刻みこまれ、一ふくの絵巻きものを創り出すものであるとすれば、赤ん坊の時期は、将来を幸福にするためにかけがえなく大切なときと言わねばなりません。

近代の脳生理学は、発達の点では、人間の脳は全く未成熟な状態で、しかも組織学的には、生後三―四年間でおよそ成人に似た状

そのことに注意すれば、生まれたときの赤ん坊の良し悪しが父親以上に母親に影響されることは当然です。そして生後年月の浅い時期ほど母親の影響を直接に、大きく受けるのです。しかも、子どもの人格の形成において、環境の影響は幼い時ほど強いのですから、人間が幸福に育つか、否かのかぎは母親の手中にあると言っても過言ではありませんまい。

このように考えたとき、乳児期における母子関係の重要性を、今更のように感ずるわけです。

さて、乳児の母子関係を考えてみますのに、母子関係は出生後はじめででき上るものではありません。もっと以前、母親の妊娠に対する考えや妊娠中の諸問題、母親の心理的、身体的状況などが影響していることをみのがしてはなりません。

さらにさかのぼって、結婚に到るまでの過程、母親の育てられた環境の影響なども大きいことを知ることが必要です。私はこのころ、とくにそんなことを考えながら、母親の子どもに対する態度を見ていますと、ますますその感を深くします。

全く食事をとらないということで、一〇歳になる女の子がつれて来られました。からだの病気をいろいろしらべましたが、とりたてるとどのものは全くみつきりません。ただ小学校三年になるまで、母親が送ってゆかなければ学校にゆけない状態であったこと、祖母が非常に過保護的で、育児について母親が主導権をもっていなかったこと、また、母親自体が幼児期に両親からわかれ、母親の愛情にうえていたことがわかりました。そして私のみたところでは、母親自身が未熟で、自分の感情を充分に抑制できない状態であり、姑や夫との関係から来る不安を処理できなくて、この子にむけてつい過保護な扱いをしていたように考えられました。

また、最近三年生の男の子が、行動がぐずぐずで、自分の意志を

発表できない——というのを主な訴えとしてつれて来られました。

これはあいにおいては、母親の性格が硬く、冷たく、閉鎖的で、周囲の人々との交際がなく、夫に対してさえあまり応答しない状態でした。そして、この子にも自分のお乳をのませないし、抱いたりおむつを換えたり、話しかけたりすることもなかったそうです。そんなわけで離婚になり、父親の弟夫婦がこの子を育てることになりましたが、この子を手わたされたときには、全く泣きも笑いもしなかったといえます。その後、この叔父夫婦がいろいろ面倒をみて養育しましたが、今も学校では自分の意志を発表できず、持物を友だちに奪われてもとりかえすことさえできないのです。しかし、学業成績は中位で、精神薄弱ではないことは確かです。

一、乳児に対する母親の態度は、どんな条件に影響されるか

母子の関係は生まれた後にきまるものではないことに注意したいと思えます

その子が両親や家族の人々に、どの程度に期待されていたか、その子を育てるだけのからだどころの準備が、母親にできていたか、また、大や姤との人間関係はどうか、経済的な条件はどうかなど、いろいろの因子が直接、間接に影響することは、今さう申す必要もないでしょう。それと同時に、生まれ出た子ども自身がその期待にこたえたかどうか問題です。男の子がほしかったのに、また

女の子であったとか、その反対のことなどもあります。未熟児であったので、母親が必要以上に責任を感じたり、緊張することもあります。また知えのおくれた子どもであったとか、その他欠陥をもった子どもであるときには、当然、複雑な母子関係になってきます。母親に問題があるばあいと、子どもに問題があるばあいとにわけ、もう少し具体的に考えてみることにします。

(1) 恵まれた結婚であったか。

恵まれた……というのは、決して経済的などの外的条件をさしているわけではありません。もちろん、お互いに悪い遺伝的な負因をもたないことも恵まれた結婚として大切なことでしょう。お互いに意識していなくても、悪い素質を持つていることもあります。この点では、まず血族結婚をさけるのがよいと思います。ここで結婚についての注意をする考えはありませんが、お互いの性格、教養、家庭環境などの調和がとれていること、また心から信頼し、話しあえる民主的な家庭をつくれることが問題です。

(2) 幸福な妻であるか。

「私は子どもに生き甲斐を感じています。主人は話になりません。主人はわがままで、虚無的で、偏屈で、ほんとうにどうにもしようがないのです」などの訴えをよく聞かれます。その母親は人生に生き甲斐をもっていないので、その空しさを忘れるためには、子どもに注意を集中させることになります。その結果子どもは母親

の過度の保護と干渉をうけるのです。

こんなとき母親自身は、その夫に對して不満を持ちながらも、それを夫に知らせようとししないで、「主人の性格だから仕方がない——」とか、「主人も忙しいし、家、子ども、年よりのことは自分にまかせると言っているのだから、これ以上責め立てるのも気の毒だ——」とあきらめているばあいがよくあります。これは、よく言えば寛大な態度ととれますが、無関心な態度、冷たい態度とも言えるのです。こんなとき、私はよく次のように申します。

「まだあきらめるのは早い、あなたはこれから一〇年、二〇年、いやそれ以上も御主人といっしょに生活し、人生の幸福を築き上げてゆきたいとはお考えにならないのですか。もしそのおつもりなら今のままではいけません。何とかして心のふれあい、本当の話しあいができるようにしなければなりません。はじめから私たちには愛情が全くないので、そんなものはいりません……とおっしゃるのなら、手のつけようもありませんが、それで夫婦生活をつづけるのは虚偽です。しかし、私のみたところでは、御主人も決してそんなに話のわからない方の方ではありません。あなたが、あまりにもよき妻、よき母、よき嫁のイメージにとらわれすぎて、つとめすぎているので、かえって水くさくそんな問題がおこっているようにみえるのです。もっと率直に、赤裸々な自分、弱い自分、人間としての真の幸福をつかみたいと切望している自分のありのままの姿を、

御主人に知らせる努力をすることが大切ではないでしょうか……」

私は、こういうような助言を与える必要に、しほはは出会うのです。

(3) 母親自身が健康で、人間的に成熟しているか。

母親自身が病身のとき、からだがだるかったり、気分がいらいらしたり、またそのために夫や姑に対して気がねしたりして乳児の世話ができないことがあります。このような状態が予想されたときには、はじめから妊娠をさけるべきだと思いますが、すでにそのようになっているばあいには、何とか立派な母の代理を選ばねばなりません。乳児期だから寝かせておけばよいと考えることは間違いです。乳児期こそ、性格形成の芽生えのときとして最も大切なときなのです。

これと多少こととなりますが、母親自身が子どもを十分に育てる資格を欠くはあいもあります。私たちは幼児期から思春期までのいろいろの問題の子どもをあつかっているとき、母親が子どもと同じく感情的にあり、対等に争っているのしほはは出会います。過保護、干渉過多、放任などの傾向を持つ母親、子どもをかぎりたてたり、おもちゃ扱いにしてよろこんでいる母親は、一般に未熟で感情的です。

そのような母親は、すでに妊娠中にその傾向がうかがわれるとどのべる学者もあります。すなわち、妊娠にまつわる不安は、母親としての準備ができているか、また夫との関係がうまくいっているか、

を示すといわれているのです。

妊婦は、妊娠により子どもの生命を自分の生命で償わなくてはならぬと考え、一種の緊張を感じ、不安になります。

人間として成熟した母親、幸福な母親は、赤ん坊の出生により夫といっそう親密に結ばれることを喜びます。その反面、妊婦は無意識の内にその絆を断ち切りたいとの欲求も強くなるもので、この接合的接触を求める欲望と自由を求める欲望との間のたえまない葛藤は、人間にとって宿命であると言われます。そして人間的に未熟な妊婦ほど、その不安が強いと言われるのです。

妊婦の不安の原因は、もちろん妊娠による生理的変化によるものですが、普段からの心理的欲求も関係が深く、たとえば、姑にいじめられ、同時に夫の愛情を十分に受けることのできなかつた妊婦が、嬰兒出生のあかつきには更に自分が夫に対して、ますます堅く結びつけられることを恐れた結果、ひどい嘔吐をおこすことがあります。このはあいの嘔吐は嬰兒をとり除きたいという本人の意欲の表徴であるとの解釈を加える精神分析学者もあります。

また、分娩の痛みをおそれ、憎み、夫にもこの苦しみを味わせたいときえ感ずる母もあります。またははじめから分娩の苦しみをさげようとして、喜んで帝王切開を希望したり麻薬で痛みを除いてもらうことを願うものもいます。このように不自然な方法でむやみに分娩時の苦しみをさげようとする母親には、母親自身の未熟さ、自

己中心的な性格、夫および家族との人間関係に問題があつて、眞の幸福感に満たされた生活を送っていない人が多いものです。したがつて、妊娠中の、あるいは分娩にさいしての母親の態度が、母子関係に直接の関係をもつと言えそうです。これらの母親の性格の未熟さは、さかのぼつて考えれば母親の生育史にその原因をもとめることができましよう。

そのように未熟で自己愛的な母親は、表面的には如何にも適応していて高い知性をもっているようにみえますが、実際には不安定で社会的なつながりが乏しいのです。そして「すぐれた女性、母、妻、嫁」といったイメージを守ることに懸命であり、教育に熱心で新知識の研究を求め、精神衛生や育児の本をよく読み、科学的雰囲気を求めることに努力しますが、育児に当つては、はげしい不安と葛藤とに直面します。

(4) 姑との関係はどうであるか。

日本の家庭における、嫁・姑の関係は、論じれば、これだけでも何冊かの本になるでしょう。ここではその関係をよくするために結論的なことを簡単にまとめます。

(a) 姑を余りおそれてはいけません。話しあえばわかるという考えで、努力してみる必要があります。

(b) 老人には老人の悩みがあります。それを理解する態度をもたねばなりません。しかしまた、どうにもならぬ面が多数にあるのも事

実です。この点では、子どもを扱うときとおなじつもりにならねばなりません。生理的に考えても、脳の中で最も高等な働きをする前頭葉が、七五歳では一〇%も縮小するのですから、がんこで、不合理なことを平気で考えたり、言つたりするようにもなるのです。

姑との関係をうまく調整したり、いろいろ広い立場から考えなおして、安定した気持ちをもつことも、母子関係に大いに影響があります。

(c) 父方の親であるほうには、夫が嫁姑間の調整の一端をうけもつべきです。夫はこの問題に介入することをきけたがるものです。

しかし、妻がくるしんでいるのですから、当然そのくるしみをわけあい、老人との話しあいをするに努力すべきです。しかしこのような老人への直役の働きかけの結果が、いつもよいとは限らないでしょう。そのときでも夫はその問題にノータッチであつてはいけません。せめても妻の悩みをきき、その支持者として励ます立場だけは、ぜひ受け持つてもらいたいものです。

姑との関係をうまく調整したり、いろいろ広い立場から考えなおして安定した気持ちをもつことは母子関係に大いに影響をあたえるものです。

(5) 母親の妊娠時の年齢はどうか

母親の妊娠時の年齢は大いに関係があります。年をとつてからの子ども、ことに「かけがえのない一人っ子」のときに、育児に対す

る関心が高まりすぎる傾向があることは、当然でしょう。

(6) 経済的に安定しているか。

経済的な原因で共稼ぎをしているとき、子どもに充分な手を加えることができなくて、食事や排便のしつけなどもうまく行かないことがよくおこります。母親の疲れからつい感情的なあつかいをしたり、普段離れているのでその補いのつもりで不必要な触れあいをする結果になることも少なくありません。しかし、適当な托児所もなく、子どもを家にねかせつ放しておくようなばあいには、心身画面の発育に大きな影響を与えらるることになります。

(7) 育児ノイローゼの傾向はないか。

最近では、育児に対する関心が高まりすぎて、子どもを母親の理想像にはめこもうとしている傾向が多いようです。お乳の与え方一つにしても、個人差のあることに気づかず、何CC残したと大きわざしている母親が少なくありません。子どももまた生きた人間であることを忘れてるようにさえ思えます。

一般の母親は、休重にしても平均では安心しない、二〇―三〇%位大きいと満足する——といった状態です。しかし実際に考えてみればわかることだと思えますが、人間は本当に大きいほど健康で強いものなのでしょうか。長寿の秘けつは痩せることだとさえ言われているのですが、赤ん坊だけは肥えるほどよいということはないのです。平均休重より三〇%以上も大きいと、腎臓、肝臓に大きな負

担をかけて、赤ん坊にも決してよくありません。現在乳児の発育の理想はどんな状態であるかということが、小児科の専門家によってまじめに考えられているのです。

育児指導は結構なのですが、こんな場所へつれて来られる子どもは、ほとんどすばらしい発育を示すもので、つれて来られない子どもこそ、それを受ける必要があるとは、全く皮肉なことだと思えます。

二、子どもをむかえるときの心構えと、取り扱ひ上の注意

以上のように、いろいろの条件によって母子関係がきまるわけですが、ここでは母親が赤ん坊に接するときの心構えと注意をのべることにします。

愛情の結晶として生まれた赤ん坊、しかも、結婚後長年月を経ている子、はじめての男の子、はじめての女の子、なごのばあいに、父母および周囲の人々の関心は格別です。これとは反対に、全く待たれなかつた子もあります。人工流産を計画された子、経済的あるいは社会的に当惑しながら産み出された子、さらに発育が不完全で、将来も母子ともに苦しむべく運命づけられているように思われる子もいます。

(1) 教育は生まれた日からはじめられねばなりません。乳児の行動が、大脳辺縁系を主体とする本能的、感情的なものであり、脳・神経系の発達とともに、大脳皮質の働きが加えられていくことは、す

でよく知られています。その行動の様式は生まれたその日から、周囲から与えられる刺激によって条件づけられるものです。

生後一カ月もたない乳児をつれた若い母親が「この子は夜間ずっとだっこしていなければ、泣きどうし泣くのですが……」と訴えてこられます。赤ん坊が泣くことは一種の生理的な現象で、しほしほ放っておいてよいばあいがあることを理解しておかねはならないのです。

泣くことは子どもが自由にあやつれる唯一の表現手段で、また、血液の循環や肺臓の発達を刺激するという、よい効果もあるので、しかも、もしこんなことを知らずに、泣く度に母親が抱いていたら、ますますささいな不満や不快で泣くようになるでしょう。そして成長しても心理的に耐久力の乏しい人間になるかもしれない。泣くとすぐ抱いたり、お乳を与えたりするのは、おろかな母で、その結果は永久的な幼稚症をつくることになることを知っても、それらにたいむです。赤ん坊のときにつけられた習慣を、あとになつてかえることは非常にむづかしいことです。白紙のときによい条件づけをしておくことが教育の秘けつと言えましょう。『教育は生まれた日から』ということは、味わっていただきたいと思えます。

(a) 抱きぐせをつけないように気をつける。

(b) ねるのは、初めから親と別の布団を用いて下さい。添寝をさせましょう。添寝の弊害は今更のべる必要もないと思えますが、寝室

もできれば、はじめから両親と一しよでない方がよいのです。

(c) 赤ん坊が便秘すれば、直ちに洗腸器で腹部のガスを排除させようとしたり、コヨリで肛門の周囲に刺激を与えて排便を促そうとする母親があります。これは直腸の粘膜を刺激し大腸に性感帯を作ることになり、後に性欲倒錯の原因にたる可能性があります。から、さけた方がよいといわれています。

(d) 子どもをあやすのになまわしたり、揺ったり、接吻したり、ことに男児のばあいには生殖器を弄んだりすることも少なくありません。これらの肉体的愛情の表現は、後にチック症や自潰行為をおこさせるとの説があります。また、子ども自身も、白濁、つまり自己満足の行為にふける傾向を有するものです。たとえば身体を揺ぶる動作、リズムカルな筋肉運動をくりかえし、その間恍惚として遠方をにらんで生殖器に手をあてている場合があります。これらは正常な幼児の発育過程における問題ですから、他に気持をそらせることはよいのですが、余りにきびしく止めさせる必要はありません。

さらに、子どもに、強すぎる刺激を与えることは、一般によくありません。子どもは毎日新しい不思議な可能性を発見し、習得してゆくものです。周囲からの過度の世話やきは自分で楽しむ能力を失わせ、子どもの自由な発達をおさえることになります。こんな子が成人になりますと、独居の生活に耐えられない、ちやほやされなければすぐ不満を持つ、精神的に幼稚な人間になることがあると考え

られています。

(e) お乳をのむことは、赤ん坊にとって一種の快楽ですが、偶然にあるいは病気でまなくなつたとき、周囲があわててのむことを強いると、強度の緊張からますますのまなくなつたり、嘔いたりすることがあります。乳の与え方も時間をきめるのがよいか、自由に与えるのがよいかとの問題がありますが、両極端はともにもわるいようです。

離乳にかかるのは、一般に生後六カ月がよいとされていますが、どんなにおくれても九カ月以上母乳だけを与えることはいけません。それ以後になると、乳児はだんだんと自我意識が現われますから、ますます離乳させることが困難になります。

以上のような子どもの取り扱いに失敗して、子どもが一度両親および周囲の人々を屈服させますと、子どもは全ての人々を支配する小暴君となつてしまいます。成長するにつれて自分の「権力への意思」になやむ人間になる可能性があります。全ての植物がたくましく成長するために、適度の日光、雨、風が必要であり、しかもそれらが多すぎても少なすぎてもいけないのですが、それと同様に、母親の愛情や保護も、その与え方が理性的で適度でなくてはならないのです。

三、むすび

生後六カ月をすぎると、赤ん坊は我々に笑いかけ、からだを動かして感情を表現します。このときが人間関係のはじまりなのです。このときに、抱くこと、話しかけること、なでることもきれいな赤ん坊は、身心の発育が阻害され、いわゆるホスピタリズムにみられる状態をおこし、笑うことも泣くこともない、感情の鈍い子どもになり、成長した後も、温かくて幸福な人間関係を成立させることが困難であると言われます。

すべて、発育の初期に与えられた刺激が、最も大きな影響を与えることは、胎生期の一〜二カ月に母体に加わつた刺激で、重大な欠陥をもつ子どもができることを考えても明らかです。また私は後天性の精神薄弱の原因をしらべましたときに、生後六カ月から一年の間の脳膜炎が、重症の最も大きな原因であることを知りました。ホールビイの報告にも、満一歳前に母親から無理に切りはなされ、不幸な生活をした子どもに重大な人格障害を殞すことが示されています。

そう考えると、脳の発達の最も盛な、しかし神経細胞の形の成熟や髓鞘化の立場からも最も重要で、人間関係の基礎の成立する乳児期か、性格形成の上にもつ意義の重大なことは今さら申すまでもないことでしょう。私はここに、一生の幸不幸は、乳児期の母子関係によって決められる、ときえ言いたいのです。